

## ◆第20話◆ 周年と自校史

自校史は、創立10周年から10年ごとに100周年まで編纂される例が多くみられる。100周年以降は、120周年であったり125周年であったりするようだ。これは、100周年で編纂する際、95乃至98周年ころから編纂委員会の編成作業に入り、10年以上を編纂期間に充てているためであると考えられる。かなり人的にも予算的にも大学にとって負担を感じるものなのだろう。だから、100年史以降は、ちょっと期間が空く。そして、10年単位での編纂は、周年式典での記念品としての性格がある。これとは別に、人生儀礼に合わせるような編纂例もある。大学ではないが、千葉県の勝浦高校が創立88周年で記念誌編纂をしている。担当の先生から「米寿だからね」と言うのを聞いた覚えがある。その時に、周年は編纂契機のひとつでしかない、と考えた。また、記念史誌の編纂経験から資料や記録の重要性に気づいた学校では、「1年のあゆみ（記録）」といった冊子を作成したところもある。

周年は、周囲を説得する、まさにエビデンスが伴った予算捻出の「根拠のひとつ」に過ぎないのである。ここに愛校心がないとまでは言わないが、21世紀の今、自校の存在意義を世に問うツールは何か、を考えてみる必要があるのではないだろうか。自校の足元を見つめ直してやる必要があるのではないだろうか。定員管理の厳密化、入学希望学生獲得の過当競争化は、一層上記のことを認識させてくれるものと思う。

大学は、まずオープンキャンパスなどのイベントに注目し、大学のイメージアップ、認知度アップに注力するだろう。次に、その手土産である。もらえるグッズが良ければ、入学希望者とそのプラス $\alpha$ が「お土産」欲しさもあって多く集まる。入学すれば、授業科目として「自校史教育科目」が存在し、自校への帰属意識の醸成と高揚を図ろうとする。しかしこれらは、対象者が限られる。少なくとも、積極的に関わろうとする意志が感じられる。漠然とした意思ではない、もう少し強いものである。

自校史は、これらを包含し、もっと広く深い大学紹介の仕事をこなすツールであるといえる。それは、設立経緯から始まり、経営方針、教学理念及び教育・研究の成果などを詳らかにする。とても短時間で説明ができない内容を編み込めるのである。こういう意味からすれば、周年を契機として編纂する自校史は、そのドメスティックな期間の記録として最適なものとなる。

「内部質保証」は、各年の教育課程（学科課程）や活動記録からのみでは、十分な判断ができない。内部質保証は、経営方針、教学方針及び成果が示され、1年1年と積み重ねをして評価を受けるものであろう。

最適ツールは、自校史となる。

自校史編纂は、人件費印刷費などの経費が嵩むことや生産性、即効性に欠けることから敬遠されがちだが、一考の価値があるのではないだろうか。